

大学生の住生活状況と満足度について

House living condition of the university student and satisfaction

木 下 教 子¹⁾ 角 田 成 子²⁾
Noriko KINOSHITA Shigeko KAKUTA

I. はじめに

次期学習指導要領¹⁾の小学校家庭科が目指すべきものとして、「生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、生活をよりよくしようとする資質・能力を目指す」としている。家庭科は、衣・食・住・家族・消費・環境など生活全般を多岐にわたり学び、知識・技能を相互に関連させながら日常生活で活用し、生活を工夫し創造する態度を育成することを目標としている。速水ら²⁾は、住領域分野は、他領域と比較して授業数のなかで取り扱う時間が少ないとし、住生活に関する知識を確実に児童に習得させることを担う役割は大きいと報告している。学校教育の住生活については、家庭科、社会科、理科、生活科、保健体育などの教科、総合的な学習の時間など様々な教育活動のなかで、行っているが、正岡³⁾は他教科と関連付けて学んでいる割合が少ないと報告している。小学校・中学校・高等学校と一貫して取り扱うことができるのは家庭科だけである。小学校家庭科では、「整理・整頓や清掃の仕方」と「暑さ・寒さ、通風、換気および採光」に重点を置き、室内環境の整え方について学んでいる。そこで将来、教員として必要な資質・能力を育成するための基礎調査として、大学生の住生活の実態や意識を明らかにすること、小学校家庭科における学習内容の知識・技能に対する理解度について把握することを目的に、本研究を行った。

II. 方法

対象者は、H大学2年生66名を対象とし、「家庭科に関するアンケート調査」を2017年10月に実施した。回収率は81.8%であった。回答した者56名（男性29名、女性25名）であった。アンケートの調査項目については、対象者の属性（性別、居住形態）、高校時の家庭科の履修状況、家庭科の各分野（家庭生活と家族、衣生活、食生活、住生活、消費と環境）に対する興味・関心度、既習後に役立っていること、小学校家庭科における学習内容（現家庭科学習指導要領に準じる）38項目を示し知識・技能に対する理解度について設問をした。前述した38項目の設問内容は佐藤⁴⁾の実施した方法に準じて実施した。

住生活については、住居形態、居住年数、季節における室温調節、自室の環境整備、各居室の清掃回数、掃除用具、住まいにおける満足度、住まいの環境整備の自己評価などについて調

1) 北翔大学教育文化学部教育学科

2) 北翔大学短期大学部こども学科 非常勤講師

査を実施した。なお、前述の室内環境整備の調査内容は黒光⁵⁾の行なった同様な方法で行なった。なお、統計的な有意差の検証に、t検定を用いた。

Ⅲ. 結果

1. 対象者の属性

調査対象者はH大学2年生56名であり、内訳は男性29名（53.7%）、女性25名（46.3%）である。居住形態については、大学入学前と現在の状況を図1に示した。入学前の家族と同居90.7%が現在は50.9%になり、一人暮らしが1.9%から47.2%と約5割が占めている。

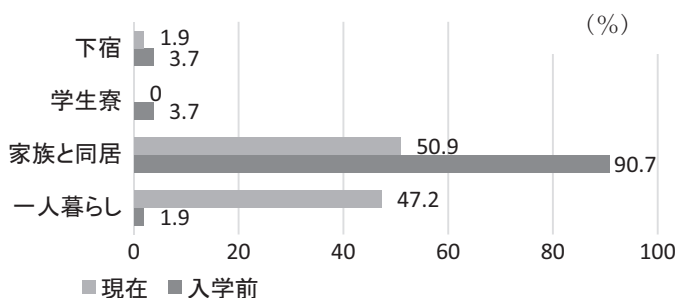


図1 居住形態

2. 高校時の家庭科の履修について

家庭科の履修については、「履修した」が94.3%、「履修していない」が5.7%であった。ほとんどの学生が履修しており、履修していないは56名中3名である。高校で学習した教科書については、家庭基礎が44.2%、家庭総合30.8%、その他25.0%と回答している。次に小学校・中学校・高等学校で学んだ家庭科の学習について、興味・関心があったかについて、4（十分にあった）、3（ややあった）、2（あまりなかった）、1（なかった）の4件法で設問した。その結果を図2に示した。「十分にあった」は小、53.7%、中、38.9%、高、20.8%と学年が上がるごとに減少しているが、「ややあった」は小29.6%、中31.5%はほぼ3割だが、高は55.9%と5割を超えていた。「あまりなかった」は、小11.1%、中24.1%、高22.6%「なかった」は小・中・高と5.6～5.7%であった。

次に家庭科の学習は家庭生活と家族、衣生活、食生活、住生活、消費と環境など各分野に分かれているため、その興味・関心度について4件法で設問した。その結果を図3に示す。「十分にあった」は食生活が42.6%と最も高いが、家庭生活と家族、衣生活、住生活の3分野が16.7%、消費環境が9.3%と順に下回った。

「十分にあった」「ややあった」を合わせると食生活が75.9%と高率であるが、住生活59.3%、消費と環境57.4%、家庭生活と家族、衣生活が53.7%の順となり、5割以上は各分野で興味・関心を示していることがわかった。

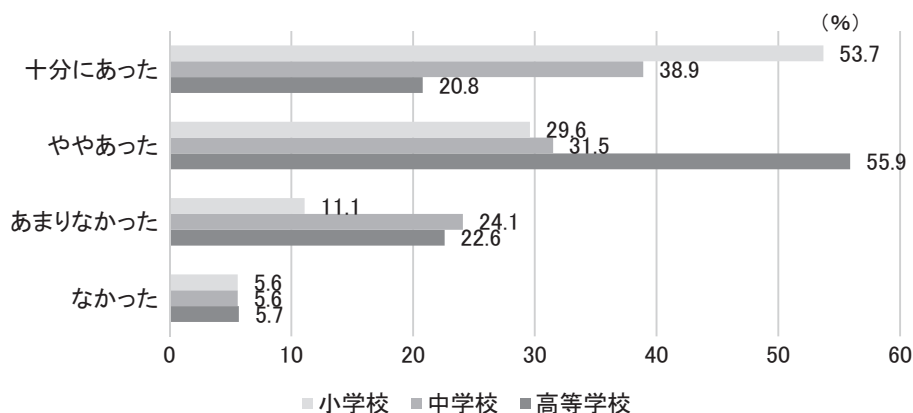


図2 家庭科の学習の興味・関心度

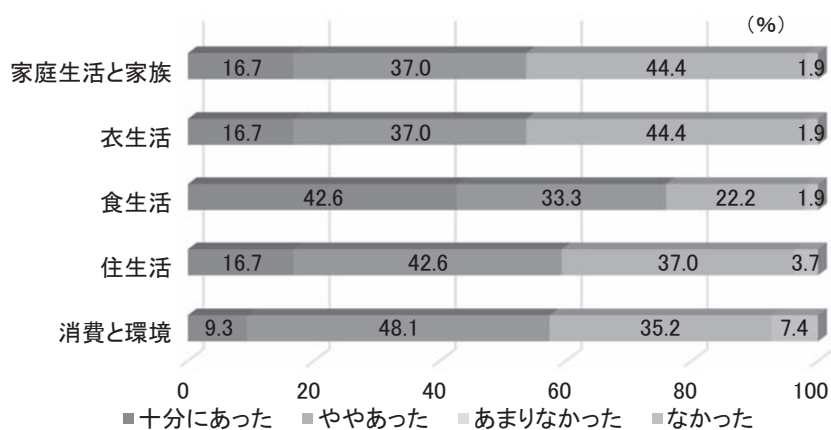


図3 各分野の興味・関心

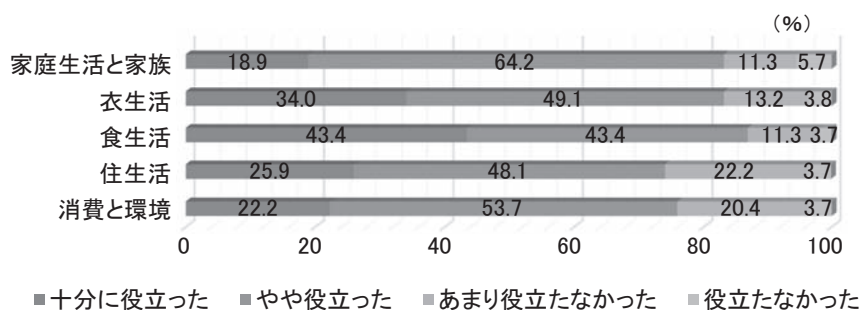


図4 現在役立っていること

次に家庭科の学習は既習したことが実際の日常生活のなかで、実践し継続していくことで生きる力につながることから、各分野で役立っているかについて4件法で設問した。その結果を図4に示す。

「十分に役立った」は食生活が43.4%、衣生活34.0%、住生活25.9%、消費と環境22.2%、家庭生活と家族が18.9%の順であった。「十分に役立った」「やや役立った」を合わせると食生

活が87.8%と衣生活，家庭生活と家族83.1%，消費と環境75.9%，住生活74.0%の順となり，前述した各分野の興味・関心は5割以上であったが，役立っている割合が上回り7割以上であった。

次に日常生活でどのようなことが役立っているのか，表1に自由記述を示す。

表1 日常生活で役立ったこと（自由記述）

衣生活	<ul style="list-style-type: none"> ・裁縫は役に立っている。 ・肌着の着用は重要である。 ・裁縫のやり方やミシンの扱い方がわかることで，何か作ったり直したりできた。 ・簡単な縫い物ならできる。 ・衣服についているタグの見方。 ・ボタン付けや簡単な手縫いができるようになった。 ・ミシンの使い方。
食生活	<ul style="list-style-type: none"> ・調理実習の時の経験が活かしています。 ・みそ汁作り，ほうれん草のゆで方，野菜の切り方。 ・料理は役に立っている。栄養面の勉強はとても苦手で，未だに知識を生かして献立を作るのは苦手。食べたい食材で作っているの，栄養面も考えるように学ばなかった。 ・調理系に関しては，料理をするようになって大変役に立ちます。 ・ガスコンロの付け方がわかる。 ・バランスの良い食事の作り方。 ・食事バランスを少し考えるようになった。 ・料理を作る際の食材の扱い方
住生活	<ul style="list-style-type: none"> ・風呂掃除

3. 小学校家庭科における学習内容における知識・技能に対する理解度

現行の小学校家庭科学習指導要領に準じて，「A 家庭生活と家族」5項目，B「日常の食事と調理の基礎」16項目，C「快適な衣服と住まい」13項目，D「身近な消費生活と環境」4項目について4件法で知識，技能に対する理解度を調査した。その結果を表2に示した。家庭生活と家族の理解度で，平均値が高いもの（3以上）は，「家族のよさについて理解している」（ 3.62 ± 0.53 ），「生活を支える仕事として，家事労働の分担について理解している」（ 3.45 ± 0.61 ），「家族との触れ合いや協力について理解している」（ 3.39 ± 0.74 ）で，理解度が最も低いものは「地域社会の一員として家庭の役割を理解している」（ 3.06 ± 0.76 ）であった。

食生活の知識，技能の理解度で，平均値が高いもの（3以上）は，「食品をいためることができる」（ 3.67 ± 0.51 ），「なぜ食べるのかについて理解している」（ 3.61 ± 0.60 ），「食品をゆでることができる」（ 3.61 ± 0.56 ）であった。平均値が3以下のものは，「地域の食文化について理解している」（ 2.76 ± 0.87 ），「食品に含まれる主な栄養素により3つのグループにわけることができる」（ 2.76 ± 0.70 ），「五大栄養素の働きについて理解している」（ 2.78 ± 0.77 ）であった。衣生活の理解度で，平均値が高いもの（3以上）は，「夏季・冬季の日常着の快適な着方について理解している」（ 3.46 ± 0.66 ），「衣服の衛生的，社会的な働きを理解している」（ 3.30 ± 0.72 ），「ミシンを用いた直線縫いができる」（ 3.04 ± 0.82 ）であり，平均値が3以下のものは，

「布を用い生活に役立つものを作成できる」(2.97 ± 0.87)であった。住生活の理解度で、平均値が高いもの(3以上)は、「なぜ、清掃をしなければいけないのか理解している」(3.45 ± 0.64)、「なぜ、整理・整頓をしなければいけないのか理解している」(3.44 ± 0.60)であったが、理解度が最も低いものは、「快適な住まい方について理解している」(3.22 ± 0.69)であった。

表2 小学校家庭科における学習内容における知識・技能に対する理解度

指導要領	項 目	4 十分に理 解してい る 人数(%)	3 やや理解 している 人数(%)	2 あまり理 解してい ない 人数(%)	1 理解して いない 人数(%)	平均値 平均値± 標準偏差
A	家族のよさについて理解している	34 (64.2)	18 (34.0)	1 (1.9)	0	3.62 ± 0.53
	生活を支える仕事として、家事労働の分担について理解している	27 (50.9)	23 (43.4)	3 (5.7)	0	3.45 ± 0.61
	生活時間の有効な使い方について理解している	20 (37.0)	24 (44.4)	10 (18.5)	0	3.19 ± 0.73
	家族との触れ合いや協力について理解している	28 (51.9)	20 (37.0)	5 (9.3)	1 (1.9)	3.39 ± 0.74
	地域社会の一員として家庭の役割を理解している	17 (31.5)	23 (42.6)	14 (25.9)	0	3.06 ± 0.76
B	なぜ食べるのかについて理解している	36 (66.7)	15 (27.8)	3 (5.6)	0	3.61 ± 0.60
	食事のマナーについて理解している	30 (55.6)	18 (33.3)	6 (11.1)	0	3.44 ± 0.69
	五大栄養素の働きについて理解している	9 (16.7)	26 (48.1)	17 (31.5)	2 (3.7)	2.78 ± 0.77
	食品に含まれる主な栄養素により3つのグループにわけることができる	8 (14.8)	25 (46.3)	21 (38.9)	0	2.76 ± 0.70
	食品を組み合わせてとることの必要性について理解している	19 (35.2)	25 (46.3)	10 (18.5)	0	3.17 ± 0.72
	栄養のバランスをとれた1食分の献立を作成することができる	14 (25.9)	23 (42.6)	15 (27.8)	2 (3.7)	2.91 ± 0.83
	必要な材料の分量や手順を考え、調理計画を作成することができる	11 (20.4)	25 (46.3)	16 (29.6)	2 (3.7)	2.83 ± 0.80
	材料に応じた洗い方ができる	19 (35.2)	21 (38.9)	13 (24.1)	1 (1.9)	3.07 ± 0.82
	料理に応じた切り方ができる	16 (29.6)	26 (48.1)	11 (20.4)	1 (1.9)	3.06 ± 0.76
	適切な味付けを行うことができる	14 (25.9)	25 (46.3)	11 (20.4)	4 (7.4)	2.91 ± 0.87

	盛り付け、配膳、及び後片付けが適切にできる	18 (34.0)	25 (47.2)	9 (17.0)	1 (1.9)	3.13±0.76
	食品をゆでることができる	35 (64.8)	17 (31.5)	2 (3.7)	0	3.61±0.56
	食品をいためることができる	37 (68.5)	16 (29.6)	1 (1.9)	0	3.67±0.51
	伝統的な日常食である米飯とみそ汁の調理ができる	30 (55.6)	19 (35.2)	4 (7.4)	1 (1.9)	3.44±0.72
	調理に必要な用具の安全で衛生的な取り扱いができる	25 (46.3)	23 (42.6)	6 (11.1)	0	3.35±0.68
	地域の食文化について理解している	13 (24.1)	17 (31.5)	22 (40.7)	2 (3.7)	2.76±0.87
C	衣服の衛生的、社会的な働きを理解している	23 (42.6)	25 (46.3)	5 (9.3)	1 (1.9)	3.30±0.72
	夏季・冬季の日常着の快適な着方について理解している	30 (55.6)	19 (35.2)	5 (9.3)	0	3.46±0.66
	日常着の手入れについて理解している	21 (38.9)	23 (42.6)	9 (16.7)	1 (1.9)	3.19±0.78
	洗濯の仕方について理解している	23 (42.6)	21 (38.9)	10 (18.5)	0	3.24±0.75
	ボタン付けができる	24 (44.4)	16 (29.6)	9 (16.7)	5 (9.3)	3.09±0.10
	手縫いをすることができる	25 (46.3)	17 (31.5)	9 (16.7)	1 (5.6)	3.19±0.91
	ミシンを用いた直線縫いができる	26 (48.1)	19 (35.2)	6 (11.1)	1 (5.6)	3.26±0.87
	布を用い生活に役立つものを作成できる	17 (31.5)	20 (37.0)	15 (27.8)	2 (3.7)	2.97±0.87
	製作に必要な用具の安全な取り扱いができる	18 (33.3)	21 (38.9)	14 (25.9)	1 (2.0)	3.04±0.82
	住まいの役割を理解している	18 (33.3)	32 (59.3)	3 (5.6)	1 (1.9)	3.24±0.64
	快適な住まい方について理解している	20 (37.0)	26 (48.1)	8 (12.1)	0	3.22±0.69
	なぜ、清掃をしなければいけないのか理解している	29 (53.7)	21 (38.9)	4 (7.4)	0	3.45±0.64
	なぜ、整理・整頓をしなければいけないのか理解している	27 (50.0)	24 (44.4)	3 (5.6)	0	3.44±0.60
D	生活のなかの金銭の役割について理解している	29 (53.7)	19 (35.2)	6 (11.1)	0	3.43±0.69
	物や金銭は計画的に使用しなければいけないことを理解している	33 (61.1)	18 (33.3)	3 (5.6)	0	3.56±0.60

適切な購入のための物の選び方、 買い方を理解している	27 (50.0)	23 (42.6)	4 (7.4)	0	3.43 ± 0.63
自分の生活と身近な環境との関わり を理解している	24 (44.4)	22 (40.7)	8 (14.8)	0	3.30 ± 0.72

消費と環境の理解度で、平均値が高いもの（3以上）は、「物や金銭は計画的に使用しなければいけないことを理解している」（ 3.56 ± 0.60 ）、「生活のなかの金銭の役割について理解している」（ 3.43 ± 0.69 ），理解度が最も低いものは「自分の生活と身近な環境との関わりを理解している」（ 3.30 ± 0.72 ）であった。

図5に既習事項の知識、技能の理解度について平均値を示した。家庭科の各分野では食生活（ 3.17 ± 0.84 ）の平均値が最も高く、順に衣生活（ 2.81 ± 0.85 ），住生活（ 2.72 ± 0.79 ），家庭生活と家族（ 2.69 ± 0.77 ），消費と環境（ 2.59 ± 0.77 ）であった。

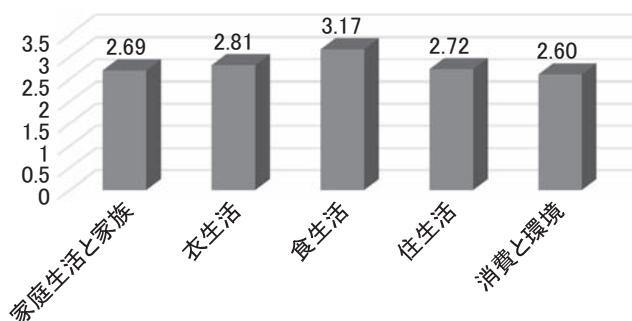


図5 既習事項の知識、技能の理解度

次に、男女別の理解度について、分析を行なった。4件法による数値を平均して、男女差を比較して表3に示した。

表3 男女別の理解度について

指導要領	項目	男性 平均値± 標準偏差	女性 平均値± 標準偏差	P値
A	家族のよさについて理解している	3.72 ± 0.45	3.50 ± 0.59	ns
	生活を支える仕事として、家事労働の分担について理解している	3.41 ± 0.63	3.50 ± 0.59	ns
	生活時間の有効な使い方について理解している	3.20 ± 0.77	3.16 ± 0.69	ns
	家族との触れ合いや協力について理解している	3.34 ± 0.81	3.44 ± 0.65	ns
	地域社会の一員として家庭の役割を理解している	3.13 ± 0.74	2.96 ± 0.79	ns
B	なぜ食べるのかについて理解している	3.62 ± 0.62	3.60 ± 0.58	ns
	食事のマナーについて理解している	3.41 ± 0.73	3.48 ± 0.65	ns

	五大栄養素の働きについて理解している	2.69±0.85	2.88±0.67	ns
	食品に含まれる主な栄養素により3つのグループにわけることができる	2.79±0.73	2.72±0.68	ns
	食品を組み合わせてとることの必要性について理解している	3.10±0.67	3.24±0.78	ns
	栄養のバランスをとれた1食分の献立を作成することができる	2.83±0.89	3.00±0.76	ns
	必要な材料の分量や手順を考え、調理計画を作成することができる	2.72±0.84	2.96±0.73	ns
	材料に応じた洗いができる	3.03±0.82	3.12±0.83	ns
	料理に応じた切り方ができる	2.93±0.80	3.20±0.70	ns
	適切な味付けを行うことができる	2.83±0.85	3.00±0.91	ns
	盛り付け、配膳、及び後片付けが適切にできる	3.10±0.69	3.16±0.85	ns
	食品をゆでることができる	3.48±0.63	3.76±0.44	P<0.1
	食品をいためることができる	3.51±0.57	3.84±0.37	P<0.05
	伝統的な日常食である米飯とみそ汁の調理ができる	3.24±0.74	3.68±0.63	P<0.05
	調理に必要な用具の安全で衛生的な取り扱いができる	3.13±0.64	3.60±0.65	P<0.05
	地域の食文化について理解している	2.83±0.85	2.68±0.90	ns
C	衣服の衛生的、社会的な働きを理解している	3.24±0.64	3.36±0.81	ns
	夏季・冬季の日常着の快適な着方について理解している	3.37±0.68	3.56±0.65	ns
	日常着の手入れについて理解している	3.24±0.69	3.12±0.88	ns
	洗濯の仕方について理解している	3.14±0.74	3.36±0.76	P<0.05
	ボタン付けができる	2.83±1.04	3.40±0.87	P<0.05
	手縫いをすることができる	2.93±0.92	3.48±0.83	P<0.01
	ミシンを用いた直線縫いができる	2.93±0.88	3.64±0.70	P<0.05
	布を用い生活に役立つものを作成できる	2.72±0.92	3.24±0.72	P<0.1
	製作に必要な用具の安全な取り扱いができる	2.86±0.79	3.24±0.83	ns
	住まいの役割を理解している	3.17±0.71	3.32±0.56	ns
	快適な住まい方について理解している	3.27±0.59	3.16±0.80	ns
	なぜ、清掃をしなければいけないのか理解している	3.45±0.63	3.48±0.65	ns
	なぜ、整理・整頓をしなければいけないのか理解している	3.48±0.57	3.40±0.65	ns
D	生活のなかの金銭の役割について理解している	3.35±0.72	3.52±0.65	ns
	物や金銭は計画的に使用しなければいけないことを理解している	3.45±0.63	3.68±0.56	ns
	適切な購入のための物の選び方、買い方を理解している	3.34±0.61	3.52±0.65	ns
	自分の生活と身近な環境との関わりを理解している	3.31±0.66	3.28±0.79	ns

男女で差があったのは、食生活では、「食品をゆでることができる」、「食品をいためることができる」、「伝統的な日常食である米飯とみそ汁の調理ができる」、「調理に必要な用具の安全で衛生的な取り扱いができる」が、衣生活では「洗濯の仕方について理解している」、「ボタン付けができる」、「手縫いをすることができる」、「ミシンを用いた直線縫いができる」、「布を用い生活に役立つものを作成できる」に男女差がみられた。家庭生活と家族、住生活、消費と環境では差がみられなかった。

4. 大学生の住生活について

1) 住生活の状況

住居形態については、一戸建てが48.1%，集合住宅が51.9%であった。居住年数については、10年未満が56.6%，10～29年が32.1%，30～49年が3.8%，不明が7.5%であった。自分の部屋の広さについては、図6に示す。順に8畳以下37.0%，6畳以下25.9%，12畳未満20.4%，12畳以上9.3%であった。

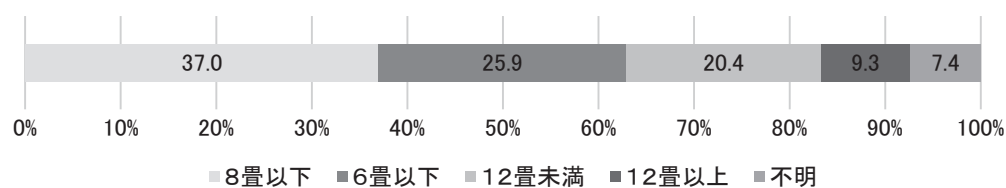


図6 自室の広さ

次に夏季と冬季の室温調節の方法について、図7、図8に示す。夏季の室温調節は扇風機55.6%，エアコン16.7%，冬季はストーブ（石油）35.2%，ストーブ（電気）27.8%，ストーブ（ガス）24.1%の順であった。

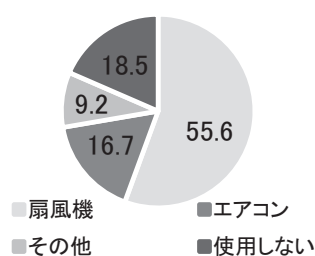


図7 夏季の室温調節 (%)

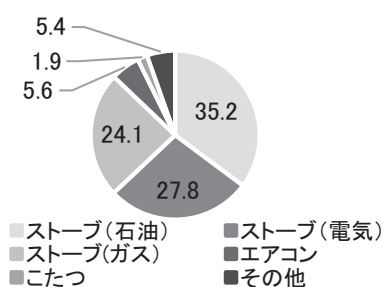


図8 冬季の室温調節 (%)

2) 換気の回数

図9に季節による換気回数を示した。夏季は「ほとんど毎日」83.3%、「週に1回」13.0%であり、冬季は「週に1回」40.7%、「ほとんど毎日」29.6%、「月に1回」18.5%と夏季より冬季の方が換気回数の頻度が低い傾向がみられた。

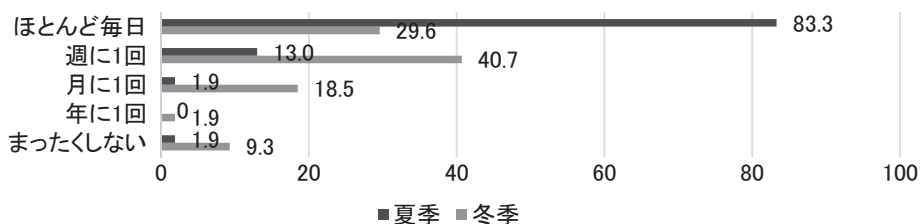


図9 季節による換気回数 (%)

3) 自室の清掃回数

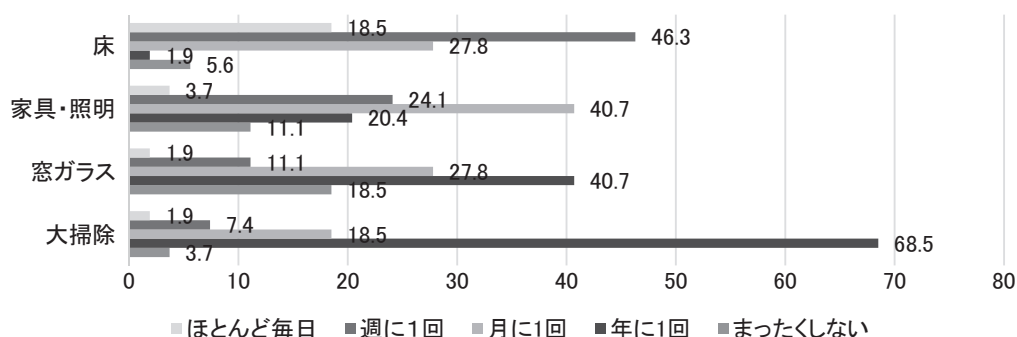


図10 自室の清掃回数 (%)

自室の清掃回数について、図10に示した。床が「週に1回」46.3%、「月に1回」27.8%家具・照明は「月に1回」40.7%、「週に1回」24.1%、窓ガラスは、「年に1回」40.7%、「月に1回」27.8%、大掃除は「年に1回」68.5%、「月に1回」18.5%であった。

4) 居室の清掃回数

図11に居室の清掃回数を示した。「ほとんど毎日」は風呂41.5%、玄関25.9%、洗面所20.4%、「週に1回」はトイレ54.7%、洗面所50.0%、玄関42.6%、「まったくしない」庭50%であった。

5) 日常よく使用する掃除用具について

図12に日常よく使用している掃除用具について示した。掃除機44人，粘着クリーナー26人，乾式モップ11人であった。

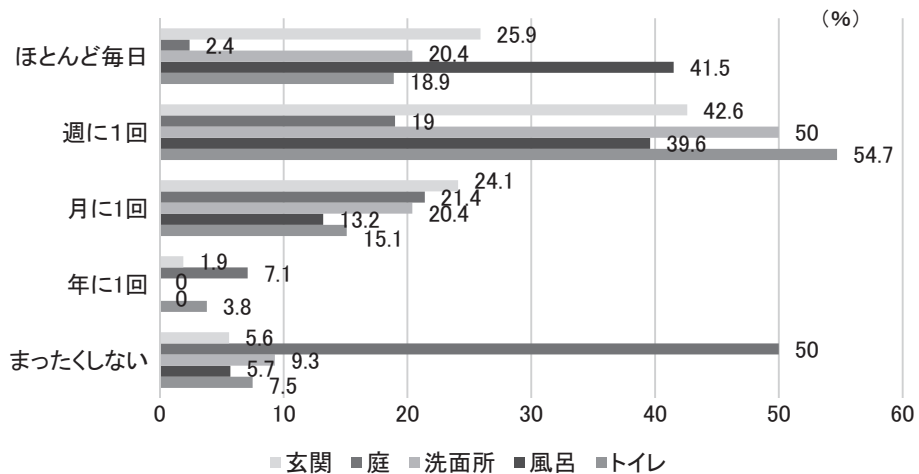


図11 居室の清掃回数

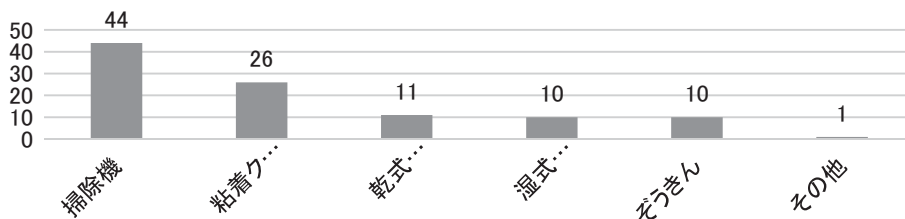


図12 使用している掃除用具 (人)

6) 住まいにおける満足度

図13に満足度を示した。「大変満足している」「どちらかといえば満足している」を合わせて96%であった。

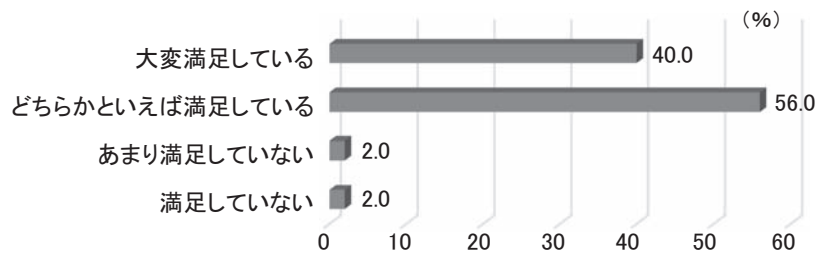


図13 住まいにおける満足度

7) 環境整備（掃除・換気など）の自己評価

図14に環境整備（掃除・換気など）の自己評価を示した。「あまり行っていない」「行っていない」を含めて30%であるが、7割は「行っている」としている。

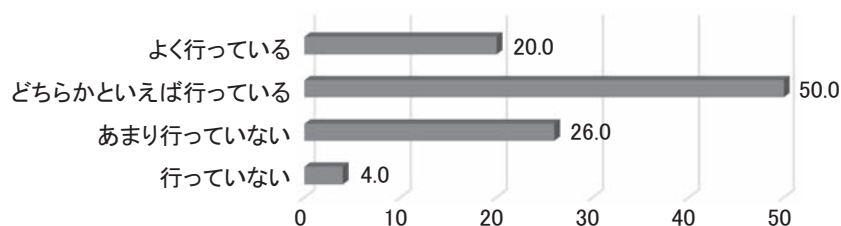


図14 環境整備の自己評価 (%)

8) 掃除をする時の理由

図15に掃除をする理由について示した。「来客がある」25人、「清潔である」10人、「健康な生活のため」8人の順であった。

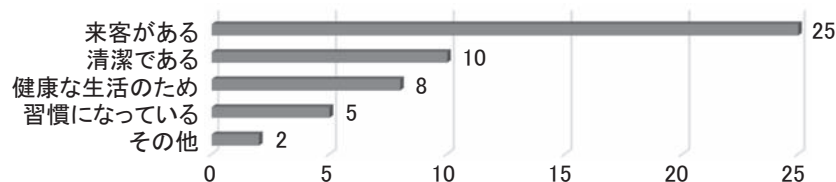


図15 掃除をする理由 (人)

9) 掃除の仕方を学んだ人

図16に掃除を学んだ人について示した。「母」33人、「父」7人、「兄弟姉妹」5人の順であった。学校教育で学んだ人が少なかった。

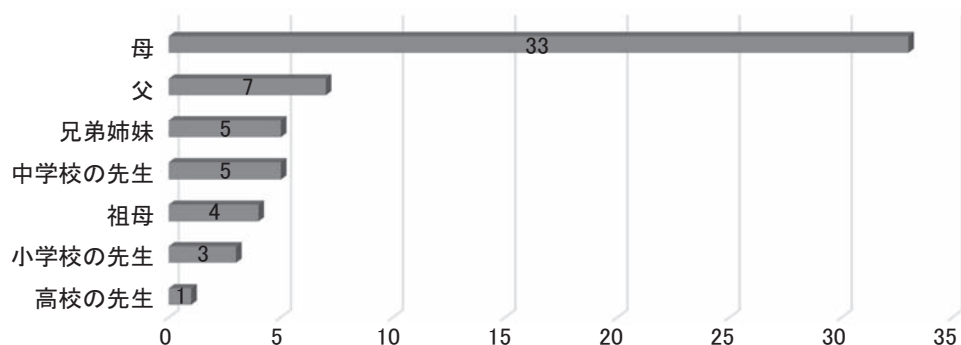


図16 掃除の仕方を教わった人 (人)

IV. 考察

調査対象者56名（男性29名，女性25名）は，家族と同居50.9%，一人暮らし47.2%と，約5割が一人暮らしをしている。

高校時の家庭科の学習については，94.3%が履修していた。家庭科の学習に対する興味・関心について，「十分にあった」と回答した人は小学校53.7%，中学校38.9%，高等学校20.8%と学年が上がるごとに減少していた。

しかし，興味・関心度について各分野でみると，「十分にあった」「ややあった」を合わせると食生活が75.9%，住生活59.3%，消費と環境57.4%，家庭生活と家族，衣生活が53.7%の順となり，5割以上は各分野で興味・関心を示し，食生活，住生活，消費と環境，家庭生活と家族，衣生活の順になった。学年が上がるごとに興味・関心が希薄になっているなか，食生活，住生活，消費と環境の順であった。家庭科で既習したことが実生活で役立っているかについて，「十分に役立った」「やや役立った」を合わせると食生活87.8%，衣生活，家庭生活と家族が83.1%，消費と環境75.9%，住生活74.0%の順となり，7割以上が役立っていることが分かった。浦島⁶⁾は家庭科を学んだ有用性として順に「食生活」，「衣生活」，「住生活」だったと報告し，同様な結果であった。一人暮らしが5割を占めることから衣食住，消費や環境等などについてより理解を図り，技能を身に付ける大切な時期にあると考えられた。小学校家庭科における学習内容における知識・技能に対する理解度について，現行の小学校家庭科学習指導要領に準じて，A「家庭生活と家族」5項目，B「日常の食事と調理の基礎」16項目，C「快適な衣服と住まい」13項目，D「身近な消費生活と環境」4項目について理解度を調査した。各分野では食生活が最も高く，順に衣生活，住生活，家庭生活と家族，消費と環境であった。その結果，食生活で知識，技能で値が高い項目は，「食品をいためることができる」，「なぜ食べるのかについて理解している」，「食品をゆでることができる」であったが，平均値が低い項目は，「地域の食文化について理解している」，「食品に含まれる主な栄養素により3つのグループにわけることができる」，「五大栄養素の働きについて理解している」であった。なぜ食べるのかについて理解していると回答しているが，食事の栄養バランスや食品に含まれる栄養素，地域の食文化についての知識が低かった。これらの食生活に関する知識・技能が高い項目，低い項目は佐藤が行った先行研究と同様な結果であった。衣生活で高い項目は，「夏季・冬季の日常着の快適な着方について理解している」，「衣服の衛生的，社会的な働きを理解している」，「ミシンを用いた直線縫いができる」，平均値が低い項目は，「布を用い生活に役立つものを作成できる」であった。住生活で，高い項目は，「なぜ，清掃をしなければいけないのか理解している」，「なぜ，整理・整頓をしなければいけないのか理解している」，低いものは，「快適な住まい方について理解している」であった。家庭生活と家族で，平均値が高い項目は，「家族のよさについて理解している」，「生活を支える仕事として，家事労働の分担について理解している」，「家族との触れ合いや協力について理解している」で，理解度が低いものは「地域社会の一員

として家庭の役割を理解している」であった。消費と環境で、高い項目は、「物や金銭は計画的に使用しなければいけないことを理解している」、「生活のなかの金銭の役割について理解している」、低い項目は「自分の生活と身近な環境との関わりを理解している」であった。男女別の理解度について分析を行なった結果、家庭生活と家族、住生活、消費と環境の分野では差がみられなかったが、食生活で、女性の方が「食品をゆでることができる」、「食品をいためることができる」、「伝統的な日常食である米飯とみそ汁の調理ができる」、「調理に必要な用具の安全で衛生的な取り扱いができる」が高く有意差が認められた。前述した全対象者では食品をゆでること、いためることについては知識、技能が高かったが、男性が低いことは小学校で習得している「ゆでる」、「いためる」が定着していないことがわかる。衣生活では「洗濯の仕方について理解している」、「ボタン付けができる」の衣服の手入れや、「手縫いをすることができる」、「ミシンを用いた直線縫いができる」、「布を用い生活に役立つものを作成できる」などの裁縫・製作の項目で男性の方が低く有意差がみられた。佐藤の行った先行研究でも「ボタン付けができる」、「手縫いをすることができる」、「ミシンを用いた直線縫いができる」、「布を用い生活に役立つものを作成できる」の4項目について男性が低く有意差がみられ同様な結果であった。

大学生の住居形態については、一戸建て48.1%，集合住宅51.9%，居住年数は10年未満56.6%，10～29年32.1%，30～49年3.8%であった。自分の部屋の広さは順に8畳以下37.0%，6畳以下25.9%，12畳未満20.4%であった。一人暮らしが5割を占めるなか、集合住宅に住み、部屋の広さは6畳以下が1/4を占めるなか住まいにおける満足度は、「大変満足している」「どちらかといえば満足している」を合わせて96%であった。室温調節は夏季が扇風機55.6%，エアコン16.7%を使用し、冬季はストーブ（石油）35.2%，ストーブ（電気）27.8%，ストーブ（ガス）24.1%が使用していた。換気回数は夏季が「ほとんど毎日」83.3%，「週に1回」13.0%であり、冬季は「週に1回」40.7%，「ほとんど毎日」29.6%，「月に1回」18.5%と夏季より冬季の方が換気回数の頻度が低い傾向がみられた。冬季の暮らしはストーブをつけるのでこまめな換気が必要となるが、住生活の理解度で、「快適な住まい方について理解している」が低かったことから、換気等は実生活では充分行われていなかった。自室の清掃回数について、床が「週に1回」46.3%，「月に1回」27.8%，家具・照明は「月に1回」40.7%，「週に1回」24.1%，窓ガラスは、「年に1回」40.7%，「月に1回」27.8%，大掃除は「年に1回」68.5%，「月に1回」18.5%であった。「なぜ、清掃をしなければいけないのか理解している」、「なぜ、整理・整頓をしなければいけないのか理解している」の理解度が高かったが、床の清掃回数は「週に1回」が5割、「月に1回」3割と実際では清掃の頻度が低かった。家具や照明、窓ガラスの清掃では「月に1回」がそれぞれ、4割、3割と意識が高い人もみられた。掃除をする時の理由は、清潔、健康な生活のためよりも来客があるからが主な理由であった。掃除の仕方を学んだ人は小・中・高の教員よりは、父母、兄弟姉妹等が多かったことから家庭のなかで培われていることがうかがわれた。居室の清掃回数では「ほとんど毎日」は風呂41.5%，玄関25.9

%, 洗面所20.4%, 「週に1回」はトイレ54.7%, 洗面所50.0%, 玄関42.6%と家族と共有する居室は自室の清掃回数よりは意識が高かった。日常よく使用している掃除用具は粘着クリーナーなど約半数が使用され, ぞうきんなど使用されていないことが伺われた。住居の環境整備の自己評価は「あまり行っていない」「行っていない」を含めて3割であったが, 住まいにおける満足度は高かった。快適な住まい方について正しく認識されておらず, 環境整備の実践が低いにもかかわらずそれを肯定する住生活の意識についての在り方が示唆された。小学校家庭科における学習内容における知識・技能に対する理解度について, 興味・関心度が高く, 役立っている食生活でも食育の推進がますます計られているなか, 食事の栄養バランスや地域の食文化について理解が得られていないこと, 家庭生活と家族, 消費と環境の分野の理解度が低かったこと, 調理や裁縫などの理解度に男女差がみられることから, 今後, 教員として必要な資質・能力を育成するため理解度が低いものに焦点をあてて, 教育内容・指導法について, 整備して検討していきたい。

参考文献

- 1) 時事通信出版局編：小学校「新学習指導要領」解説付き新旧対照本2017 6
- 2) 速水多佳子, 西村睦美：家庭科教科書における住居領域に関する記述内容の分析と考察
鳴門教育大学研究紀要第31巻 2016
- 3) 正岡さち, 小谷智恵, 亀崎美苗, 田中宏子：島根県の小学校家庭科における住教育の実態と課題 島根大学教育学部紀要（教育科学）第46巻53～60 平成24年
- 4) 佐藤ゆかり, 吉澤千夏, 佐藤悦子, 徳丸定子, 細江容子, 光永伸一郎：教員養成課程学生の入学到達度調査からみた家庭科教育の課題 日本家政学会誌 Vol63 No.8 451～460 (2012)
- 5) 黒光貴峰, 徳永礼美, 新馬場有希：大学生の室内環境整備の実態と意識 鹿児島大学教育学部研究紀要 62巻 2011
- 6) 浦島智明：大学生の家庭科「住」分野とインテリアに対する意識 佐賀大学研究紀要 Vol17 No.1 89～97 (2012)

